

# 杉野竹弘関係歌合集

中山成一

## ①『嘉永五年詠草合』

表紙 (右上) 「嘉永五年」

(中央) 「詠草合」

(左上) 「子十一月」

(見返し)

人数付

一径

安清

道晁

精雄

興宣

俊卿

大秀

春里

春樹

竹弘

一番

左 持

千鳥

道晁

小夜中とよや更ぬらし御手洗の川へさひしく千鳥鳴なり

右

春樹

よしの川かは風寒みさよ更て友よふ千鳥声しきる也

おなし寒水の千鳥の声、とり／＼身にしみて聞え侍り。おし

あはせてよろしき持とや申へからん。

二番

左

春里

難波瀉あしまの月の出汐に立さわきつゝ千鳥鳴也

右 勝

竹弘

ふき渡るあらしや寒きすまのうらの浪のよる／＼千鳥鳴なり

難波のあしのをかしきふしもみえ侍れと、須磨の浦の浪音た

かきしらへには立およひかたくやは侍らん。

三番

左

安清

あかつきのねさめの千鳥声さむく鳴は蘆へに霜や置らん

右 勝

精雄

ゆふしほの今みちぬらしおしてや難波の浦に衛しはなく

千鳥のね覚たるをおし極めていはれたるや、申むねに侍らん。

夕しほのみちくる難波の浦、けしき有と申へし。

四番

左 勝

俊卿

佐保川の清きかはせになく千鳥その声きけはいのねかねつも

右

興宣

風渡るさほの河瀬の音さえて千鳥鳴夜のねさめこそうき

右、やすらかによみおろされたるものゝ、結句おもはしからすや。左、さるふしも見え侍らねは、いさゝかまされりや申へからん。

五番

左 持

大秀

淡海はらゆふ波千鳥汝か鳴は心も萎シズにいにしへそ思

右

一径

沖つかせあらいそ浪の弥高にたてると共に千鳥鳴也

左、淡海はらとは青海はらの事にや。淡海は近江の湖にて、淡海はらとつゝけたる、聞なれ侍らす。そのうへ、下のかた、こと／＼古哥のまゝなり。右のかた、四の句調くたけて聞え侍れは、勝負なくや侍らん。

六番

左 持

道晁

ぬは玉の夜しほや今はみちくらん難波の浦に衛鳴也

右

竹弘

夜を寒みさわく嵐に浦浪の立居ひまなく千鳥鳴也

左右とも申むねも侍らねは、よき持にこそ侍らめ。

七番

左 勝

春里

友千鳥なきて立にし跡見ればよみもしられぬ文字そ残れる

右

春樹

友千鳥鳴を夜な／＼きゝ馴て夢もさはらぬ須まの浦人

左、いとをかしくもよみなされたりや。右、浦人のうへを夢もさはらぬといひすへたる、いかゝに侍り。左のめつらしきにそ立およふへくも侍らす。

八番

左 持

安清

沖かせにしほやますらん雲ひなす渡る千鳥の声さわくなり

右

興宣

須磨のうらゆ浪ちをかよふ村千鳥汝かなくよさはいねられぬかも

左、沖かせといふより、雲ひなすわたるちとりなど、詞とゝのふらす。右、須磨の浦浪ちを、といひてこともなかるへきをことさらにゆ文字を加へ、又汝かなくよさはなど、ことさまに侍れは、おしあはせん持にこそさため侍らめ。

九番

左 持

大秀

波まくらたひのうきねに友千鳥こゝろもしぬに鳴とよむなり

右

精雄

難波かたむれある千鳥立みればあまのつりふね今は漕てな

左、三四の間、我聞ことをいはては、千鳥の心をいふ事になりて、ことわりたかへり。右、千鳥の立をみて今舟をこけと

いふ何事とも聞とりかたく侍れは、また持とそ申置てん。

十番

左 勝 俊卿

佐保川の河かせ寒み夕くれに友よふ千鳥きけはさひしも

右 一徑

鯨魚とる淡海のうみを沖さけてみち来るしほに千鳥鳴なり

右、淡海のうみは湖なれば、汐のみつへくもあらず。左のこともなきかたるなふ勝にこそ。

十一番

左 雪 道晁

しら雪のふるとそ見しか庭の面の梢はやかて花咲にけり

右 勝 精雄

立いて見るへかりけりかつらきやたかまの山の雪のあけほの

庭の木すゑもさるけしきにみえ侍れと、高まの山の高きすかたにはおくれたりと申へし。

十二番

左 安清

真しらゆき山下かせにふりしくは春のよしの嵐とそ見る

右 勝 竹弘

はらはさるちりも落葉もうつみつ雪社庭の朝清めすれ

左、真白雪なといと古めきたるに、下のかた、無下に後の世の姿になりたるや、こと物を取あはせたるやうなり。右のちりも落はもうつみつといふには、いさか申試みたき事も侍れと、さはさて左のうたよりはまされりと申へし。

十三番

左 春里

松浦かた空かきくもりふる雪に沖の小島は見えすなりにき

右 勝 一徑

山さとのかき根は雪に埋もれて野へもひとつに成りにける哉

左、さるけしきには見え侍れと、下のかたに松らかたのよせあらまほしき心地す。右、山さとの垣ねつきの雪は、一きは見所有と申へし。

十四番

左 俊卿

わかやとに見にこそ我せしらかしの枝もとををにみ雪ふれれば

右 勝 春樹

常盤山禁のまつの下はまてみながら雪となりにけるかも

左、結句み雪ふりたりとあらては叶はず。右の常盤山、いさかまされるにや。

十五番

左 持 大秀

ましらゆきいやたし／＼に降りしくは花散ることく見れとあかぬかも

右 興宣

常に見れとあかすやあらなんみよしのよしの山の雪の曙

左、詞みたれて意とほらす。右、あらなんといへるは、あれよとねかふ詞にて、理たかへり。よて持とす。

十六番

左 持 安清

ふる雪に葉山しけやまけふよりは白あさ木綿の衣着にけり

右 一径

あらしふくしな戸の風も治りて静に積る峰の白雪

白ゆふは、衣などになすへきものにあらねは、かくはいはるましくや。みな白妙の衣きにけりなといはよかるへきを、あまりめつらしくとかまへられたるや、かへりて口をしき心地す。右、しなどの風など、わさとまうけ出たらんには、下のかたに言よせなくては詮なし。これも持とや申へからん。

十七番

左 持 道晁

草も木もおなしゆかりになりけりふり積雪のうとくもあらねは

右 興宣

夜を寒み朝起見れば久方の天山だけはみ雪ふりたり

左、おなし色にそなといひて、下のかたわきてふらねはなとあらは、事もなかるへし。あまりめつらしくとかまへられたる、いかにそやおほえ侍り。右、朝またき起出てみればとやうにいはいはよかるへきを、朝起みれとはいはれたる、いと俗に聞え侍れは、また持とそ申おきてん。

十八番

左 勝 春里

春ならは花とそみまししら雪の棚引やまに雪そ積れる

右 精雄

草も木も春ならなくにしらゆきのふり来る見れば花そ咲ける  
右、ふりつむみれはとなくては、叶はさるこちす。左のか

た、させる難もみえねは勝にこそ。

十九番

左 俊卿

白妙のころもて寒しわかやとの庭の木ことに雪のふれれば

右 勝 竹弘

降りつもる雪を梢にいたよきて冬こそ松の老は見えけれ

左、すかたはあしからねと、白妙といへるや何となく冬めかぬ心地す。右のめつらしくよみなされたるにそおよひかたかや侍らん。

二十番

左 大秀

しら雪の降りしく時は遠近の山をも野へも花そちりける

右 勝 春樹

ひとたひはふみ分にけるかよひちの又あともなく積る雪哉

左、山をもものを文字、不用也。右は、こともなく聞え侍れはろなふ勝にこそ侍らめ。

(佐賀県立図書館所蔵伊杉 19-10245)

②『安政二年詠草合』

表紙(右上)「安政二年二月」

(中央)「詠草合」

一番

左 勝 雪中鶯 維足

鶯の声のみ春になりぬれとまた雪消ぬそのゝたかむら

右 久延

遠近に鳴鶯の声す也あやにくけふも雪はふりつゝ

左、理りよく聞えたり。右、遠近といへる、何の為にや。又、

あやにくといふも詮なし。左勝、すべて道理よく聞ゆればあ

やしき詞もおたやかになる也。道理きこえねはおたやかなる

詞もさし出たる様にて、あやしき也。

二番

左 持 厚道

さえかへり猶ふる雪に鶯は春おほえてや音をは鳴くらん

右 竹弘

ふる雪はきゆとも見えぬ谷の戸に鳴鶯や春を告らん

左り、春おほへてやとは何にて春をおほえたるにや。何を春

とて、とせは聞ゆへし。右は、谷の戸とは、柴の戸などのこ

とく、戸は家の事と思へるにや。師説には、谷の戸とは、谷

の口などいはんかことしと承ぬ。これも山里に、とせは聞ゆ

へし。

三番

左 勝 維足

春寒み猶ふる雪のたかむらにおもひかけなき鶯の声

右 竹弘

鶯は梅の花かさきつゝ鳴空かきくらし雪はふれとも

左、心あきらかに理りも聞えたり。右も、聞えぬにはあらね

とも、きつゝなくといへる、詞つまりて哥の体いやし。惜き

哉。来てそなくとせは、此哥勝なるへし。

四番

左 持 厚道

ふる雪にはなは見えねとしかすかにのとけかりけり鶯の声

右 久延

ふる雪を人もすさめすなりぬらん今朝鶯のはつ音きゝては

左、ふる雪に春は見えねとは、雪に春の見ゆる筈なれとも、

雪にいまた春か見えぬと云様に聞ゆる也。右、人もすさめす

なるとは、人もすさめすかる人もなしといへると同詞にや。

さらは、愛し翫心なるへし。鶯の声をきかぬ内は、人が雪を

愛し翫へとも、鶯の鳴てより以来は、雪を愛する人なしとい

ふにや。

五番

左 残氷 維足

はる風もさすかいたらて二月のいまたに氷る山のゐの水

右 勝 竹弘

はるかせのいたり至らす見ゆる哉池の氷のとけみとけすみ

左、春風もさすかといへる、何の詮なし。右、つゝけからよ

しといふにはあらねと理り聞ゆ。

六番

左

厚道

花鳥の余所はのとけき春なるに氷とちけり諏訪の水うみ

右 勝

久延

春わかみ風もときあへす残しけり池の汀は猶氷つゝ

左、余所はとは、信州の外はといふ心なるへけれとも、湖の岸から外の地はといふ様に聞ゆ。先年三月すわ通行の折、見たりしに、中々其辺のとかなるけしきなく、極寒成しかとも、氷は不残消たり。右、風もときあへすといへる、理は聞えたれとも、詞のさまみやひならず。しかし、左よりはまさる哉。

七番

左 勝

維足

若なつむ袖の匂ひにとけつらし沢辺の氷残りすくなき

右

久延

山ふかみ岩まの水のこほれるはまた春風のいたらさるらん  
右、やすらかに理聞ゆ。左、みやひたるすかたはなけれとも、袖の匂ひにといへる、めつらしければ、勝とす。

八番

左 持

厚道

日影さへうとき谷まは春きてもこそその氷のとけそのこれる

右

竹弘

谷かけはさす日の光うとくして春にも残る薄氷かな

左、とけそのこれる、少しきゝぐるし。とくるともなし。又は、猶そ残れるなといひてもすむへし。右、さす日の光とい

へる、此さすと云詞もきゝにくし。されとも、とけそのこれると云よりも、さす日の光は、いさゝかきゝよし。右、勝にやあらんと思へど、猶持なるへし。

九番

左 持 暮山霞

維足

立いてゝかすむゆふへになかむれは山へそ早く暮そめにける

右

竹弘

明ほのと人はいへとも山のはの霞むゆふへや立まさるらん  
左、心あきらかなり。右、人はいへともとは、人ことに賞すれ共といふ心にや。たくみなる様なれとも、いひさまくはしからず。又、うるはしき姿もなし。心に詞のまけたるなるへし。これに依て持とす。

十番

左 勝

厚道

花鳥の色音もなへてゆふくれの霞につゝむ春の山本

右

久延

山ふかく霞こめたるゆふくれはからすもおのかねくらとふらん  
左、よく聞ゆ。右、ねくらとふらんとは、ねくらに行といふこと也。迷ひて尋ねあるくと心得るは、ひがこと也。依て、右まけなるへし。

十一番

左 持

維足

入日影のこる光も見えぬまで霞にけりなゆふくれの山

右

久延

ゆふくれに見れとも見えぬ山のははいく重霞の立へたつらん  
左、日の光の霞に見えぬといふも、余りに趣向過たり。右、  
夕くれにといふことを、初五字に置ては、いきほひ末にかゝ  
らす。山のはの見れとも見えぬ夕くれはとせは、夕くれの詮  
しかと立て聞ゆへし。

り。猶ふる雪にとすへし。左、雪にも春はかくれさりけりな  
としたらは、聞ゆへし。  
左勝五 右勝三 持五

十二番

左 勝 厚道

山のはは深き霞にうつもれて入日の影ものとかなりけり

右 久延 勝壺 持弍 負四

右 竹弘

もゝ鳥の声もねくらにしつまりてゆふへの山は打霞つゝ

竹弘 勝弍 持三 負二

左、山の霞に埋れたりとて、入日の影ののとかなるへき理り  
少いかゝ也。右、打霞たる山になく百鳥の声のねくらにしつ  
まりたるを、いかにしてはるかにきゝたるにか。心得かたし。  
左、入ぬへき山は、霞にうつもれて、夕日のかけそのとかな  
りけるとせは、少しは聞ゆへし。右、百鳥の声のしつまりし  
ねくらは、此方の事にて、打霞たる夕への山は、彼方の事と  
云作者の心なるへけれとも、左様には聞とりかたし。まけな  
るへし。

(佐賀県立図書館所蔵伊杉 19-10251)

十三番

左 久延

鶯の谷より出る声きけはふるかひもなくふれる沫雪

右 勝 竹弘

谷の戸はまた雪ふかし鶯のなのりそめたる春の初声

左、降かひもなきわけは、いかなるわけにや、心得かたし。  
右、また雪ふかしといひ切たるゆへ、心得かたき様になるな

③『六十四番歌合』

表紙（中央）「六十四番歌合」

一番 立春風

左 持

孝儀

天の原かすみそめたる朝より吹あらたまる春の初かせ

右

嘉樹

日影さす軒のしめ縄打なひき今朝たつ春のかせのとか也

左、本末ゆるひなくいひおろされていとさはやかに聞え侍る中に、立春といふ事みえ侍らねと、そは末の吹あらたまるはるとつゝきたるにてまきるましくこそ。右、日かけまちえて軒のしめなはのゆらきそめたる、けにさるあしたのものにしていとのかにこそ聞え侍れ。されは此つかひ、左はたけたかく、右はこまやかに、いつれよろしき巻頭の姿なるへし。

二番 遠山霞

左

嘉保

鳩の海のなみ風絶て比良かねの雪もかすみに消る春かな

右 勝

千竹

車船波路すき行煙よりから山眉は霞みそむらむ

左、なきわたりたる湖のおもていとのかにはみえ侍る。ものゝ其みる所をさゝねはひらのねきはめて遠しとも聞きため侍らねと、かすみに消るといへるわたりにちかゝらぬさまはみえ侍るへし。右こと国かけて往かふ車舟の煙より韓山まゆのかすみそむらむ、今のけしきをよくもおもひえられて題意たしかに聞え侍れば、左のかすみいさゝか立おくれたりと

や申侍らん。

三番 窓前鶯

左 持

皆江

敷たへの枕にちかき窓に来て朝いゆるさぬ鶯のこゑ

右

柏子

朝寝髪かきやる窓に聞ゆ也軒端のうめのうくひすの声

左、ねやちかく鳴らんにはいきたなき人もとく起いてぬへくこそ。右、くしけの鏡とく鳴そめたる声のほひいつれをかしう聞ゆる中に左の下の句いひふりてめつらしからず。右、二句かきあくるとやにいほまほしきこゝちす。されはかたゝいさゝか申むねなきに侍らねは持とや申侍らん。

四番 隣家梅

左 勝

万寿子

うめのはな垣をへたてゝみる宿は春を隣の心地社すれ

右

磯子

中かきはへたてつれとも梅の花匂ひはしめぬ春もなき哉

左、春はとなりにのみとうらやみたる心をさなくよみ出られたる、いとをかしうこそ。右、へたてつれとも、といへるあたりなつかしからず。立へたてゝもなといはゝことなうや聞えん。結句も春なかりけりとあらは、なたらかなるへくや。されはさるふしもなき左の梅にほひ深しとや申侍らん。

五番 門柳

左

皆江

門にいてゝ春の日永の手すさひにむすひてはとく青柳のいと



右 勝

穂立

誰為に眉いそくらむ吾妹子か門のはいりの青柳の糸

左、をかしき趣には侍れと、二句永き春の日の手すさひにとやうにいふへきこゝちす。又すみた川舟まつほとの手すさひにむすひてはなつ青柳のいとゝいへるあり。そをかすめられたるには、あらさめれとちかくうちあひたる、いとかひなくこそ。右、妹か門にたてる柳のまゆなつかしうよみ出られて申むねも侍らす。されは、左右立ならひたる門なから、右のかたにこそひかれいるへう思ひなされ侍れ。

六番 古宅春雨

左

孝儀

住すてゝ年をふるやのふるひさし音も聞えぬ春雨そふる

右 勝

竹弘

年ふりし軒の瓦にむす苔のみとりふかむるはるの雨かな

左、さる淋しさはみえ侍るものゝ、音も聞えぬなどいはんには、こけなどのさまなくてはともおもはれ侍り。右、さゝはるふしもみえ侍らねは勝たるへし。

七番 春月幽

左

知愛

夕まくれ覚束なくも行かりの声のほのかにかすむ月かな

右 勝

青柳のいともうこかぬ夕暮のかすみにもるみか月のかけ  
行かりのおほつかなさもさる趣には侍れと、風なき夕ぐれ  
けしき、いととしつかにあはれかきりなき秀逸の柳のい  
とはかけても及ひかたくや侍らん。

八番 暁帰雁

左 持

豊苗

たつかりのつらをほのかに見ゆるかなかすむ山田の明かたの空

右

穂立

月のこる外山のかすみほの／＼と打なひきても雁の行らむ  
左の山田、右のとやま、かた／＼見くらへ侍るにおなじかす  
みのゝとかなる空いつれをあはれのふかしともおもひわき  
かたくとそ。

九番 暮山花

左

芳洲

打わたすふもとの木立暮はてゝ高ねにのこる花のしら雪

右 ちか

竹弘

高砂の尾上の花は入相の音するころそいろまさりける

左、けしきをかしうはみえ侍れと、末のかたくれのこる花の  
しら雪とやうにあらは、事たしかにや聞え侍らん。右、入相  
のこゑしつかにくれわたる花のゆふはえいとえんにこそ聞  
え侍れ。

十番 落花多

左 持

宗肅

更に又夕かせたちて大る川散うく花に花のちるなり

右

磯子

梢にはのこりすくなく散はてゝ花のむしろを敷かとそ見る  
左、其所にうちむかふこゝちしていと／＼おもしろう聞なき  
るゝうちに、下のかたちりうく花の上にはなのちるとやうに  
いはまほし。右、木末にはといひて下の木かけのさまをきか

せたるならめとさまてはおよひかたくやとも、おもはれ侍り。  
左右ともにいさゝかつゝたらはぬかたも侍れはちと申置て  
ん。

十一番 籬山吹

左 持 芳洲

つみためしこかねの山とみるはかり垣の山ふき花咲にけり

右 満春

のかれすむ人の籬か世のさかをいはぬ色なる山ふきのはな

左は、さもにきはゝしき家の庭に白真砂むらなくしきわたし  
てまかきたわゝに咲出たらんさま、めさむるこゝちす。

右は、よをうちわひてかすかにすまへるさま、中々ゆかしう  
こそ。左右趣はうらうへなから哥のたけはおなしほとに、い  
とゝめてたうこそ聞え侍れ。

十二番 首夏衣

左 万寿子

夏衣うすき袖にもこのころかな春のかたみの花の匂ひは

右 勝 嘉樹

散のこる桜しあらはぬきかへし夏の衣も花そめにせむ

左、一わたり聞ゆるやうには侍れと、夏の衣にぬきかへたら  
んには、花の匂ひのゝこるへきことわりなくや侍らん。右、  
ことよくしたてあけられて、春をしたふ心の色のいちしるき  
には、左の衣たちおくれや見え侍らん。

十三番 雨中新樹

左 孝儀

村雨にぬれたるいろの落葉こそ又一しほのみとりそひけれ

右 満春

降雨に友よひかはすかへる手のもみちの落はいろそひにけり

右、上のかた序哥の姿なれとも、あまりたしかにいひなされ  
たるからに、かへるてもみちに声あるかとあやしまれ侍り。  
左、さはかりの手際はみえ侍らねと、さる難はみえ侍らす。

十四番 水辺卯花

左 持 宗肅

細石川きしの卯の花影見えて夕すゝしき波のいろかな

右 竹弘

水鶏啼小河のみつに影みえてきしのうつきは花咲にけり

おなしさまに咲出たる河辺のうつ木、いつれを色のまされり  
ともみわきかたくこそ。

十五番 故郷時鳥

左 勝 万寿子

古里のむかし恋しきわ袖に涙をそへて鳴ほとゝきす

右 穂立

ほとゝきす来てを啼らむふる郷の卯の花かきのあとたつねつゝ

左、昔をしのふ折しも、ふと時鳥の鳴出たらん。けに涙もそ  
ひつへし。右、くつれたるまかきのさま、あはれにあしから  
すは聞え侍れと、時鳥の鳴らむ事をおもひやりたるのみなら  
んよりは、たしかに聞えたるかた、題意によくかなふへくや。

十六番 五月雨久

左 豊苗

さみたれの雨はいく日か杉の戸のいふせさをのみいひくらしつゝ

右 勝

さみたれの降そめしより夏衣かけてほすへき晴間たになし

左、詞いとよくはたらきては聞え侍れと、二の句雨にいく日  
かとなくては自他たかひ行か。右、さる申むね侍らねはかち  
たるへし。

十七番 林下水鶏

左 皆江

月見つゝそこはかとなき夜明ははやしかくれにくひな鳴也

右 勝 磯子

栗の花こほれて匂ふ山そひの林の奥にくひな啼なり

月をみはやすとてさまよふ道のかたへに、ふと聞ゆる声折に  
あひてたゝならずは侍れと、山本の栗の林ことにめつらしう、  
さるをくらきのかげよりかすかにもりくる声は一きはあは  
れなるへくこそ。

十八番 江上螢

左 嘉保

雨はるゝ入えの柳かせ見えてすかりかねつゝ飛ほたるかな

右 勝 穂立

掘え川夕風たちてすゝしきのかきりをなみに飛ほたるかな

入えの柳けしきはさるものから、下の句引はなれてや聞えん。  
枝にすかりかねてなどやうにあらまほしくや。されは夕風わ  
たるなみの上にたゝよひ飛らんかた、光さやかなりと申へし。

十九番 夏月涼

左 勝 芳洲

久かたの月のかつらも夏は猶水枝させはかすゝしかるらむ

右

かせならて袂の上のすゝしきは鴨の河はらの夏のよの月

左、月のかつらも秋は猶、といへるをまたあたらしくしたて  
かへられたるなみ／＼の手際とはみえ侍らす。右、上のかた  
うちきくやかてすゝしきのみにとほるまてにおほえ侍れと、  
左にかけくらはへては、いさゝかひかりのおくれたるかたにや。

二十番 瞿麦露

左 勝 知愛

吾妹子か情の露にぬれし夜の床なつかしき花のいろかな

右 満春

今はとてしらむ螢の影ならて露にほのめく撫子のはな

右、露にほのめくといへるあたり何となく夕貞の哥めきてや  
みえ侍らん。左、さるえんの詞もて首尾よくいひかなへられ  
たる、申むねも侍らねはまたかちとこそ申侍らめ。

二十一番 島夕立

左 勝 豊苗

舟よせむ程もなみちにかせあれて夕たつ雲のくらかけの島

右 柏子

海原はうき雲さわくはかりにて夕たちすなり淡路しま山

左、舟よせん島はほともなきに、あわたゝしき夕立の雨なる  
かなといへる意なるへし。右、海上に雲のさわくとみるか中  
に、夕立はやくあはちしまにかゝれりとの意なるへけれど、  
さまては聞とりかたきかた侍り。されはかちは左のかたと申

へし。

二十二番 都納涼

左 持 知愛

鴨川の河はらの夏の夕すゝみ都は春にかきらさりけり

右 千竹

たきしめし香さへ匂ひてをとめ子か袖もすゝしの加茂の川かせ

左 哥、すゝみは春をもはらなるに、夏もするをみれば、都にてははるのみにもかきらさりけりとやうに聞ゆ。詠者の意はさにはあらで、都のにきはひは春のみにもあらさりけりといへるならめときは聞とりかたくや侍らん。右 哥、いとなつかしういひなされたれと、をとめ子はたをやめといはまほしく又末のかたすゝしのかもとつゝくあたり、いかにそや聞え侍り。ともに其難のかれ侍らねはおしあわせて持とす。

二十三番 新秋雨

左 持 嘉保

秋はまた浅ちか原の白露を又置そへて小雨降きぬ

右 柏子

夏はまたとほくゆかしをふる雨の音にそ秋のさひしさはしるかた／＼趣はをかしけれど、末のかたともにつまりて聞え侍れは、おなしほとゝの哥なるへし。

二十四番 幽居萩

左 持 宗肅

けふも又庭の萩はら風たちぬひとりある身の袖ぬらせとや

右 柏子

この秋もひとりさけとや草の戸をさして音なふ萩の上かせ  
独すみぬる幽居のさま、左右ともにいひかなへられてかた／＼申むねも侍らすや。

二十五番 苔路露

左 持 皆江

こけむしろ敷たる上に白玉をかさなる物は露にそありける

右

松かけの山路の露のふかければこけのみとりのいろやそふらん  
苔のむしろに玉しきわたしたるも、松か枝よりしたゝりてみ  
とりふかむるも、ともに露のちからにしていづれも題意たし  
かによみすゑられたるよろしき持にこそ侍らめ。

二十六番 枕上虫

左 豊苗

ひとりねの枕はなれぬむしの音はうたて身にしむ物にそ有ける

右 かち 磯子

人をまつ我手まくらの露けさを野へにならひてむしや鳴らむ  
左のまくらはなれぬむしのねこよなうみにしみては聞え侍  
れと、右の野へにならひてなといひなされたるあたり、一き  
はちからまさりてや聞え侍らん。

二十七番 月前鹿

左 持 宗肅

こよひ又妻まきかねて有明の月にをしかの音をや鳴らむ

右 満春

照月のかつらの露に立ぬれて小鹿なく夜は物そかなしき

よもすからつまゝきかねてしらみ行日かけにしのひあへす  
鳴出たるも、月さむきよはの露に立ぬれてうちわひたるも、  
いつれかあはれならさらむ。左右ともにかくとゝこほりなく  
つゝけられたる。さらに申むねも侍らねは、秀逸の持とこそ  
申置侍らめ。

二十八番 漁村月

左 勝

芳洲

浦かせは松によわりて海人かすむ蘆のとま屋に更る月かな

右

嘉樹

浦まつ葉の葉こしの月にあくかれて蟹かふせ屋をとほぬ夜もなし  
海人の苦屋の月さるかたにけしきあり。浦松の葉こしのかけ、  
又あはれならずは侍らねと、左のかた一きはしつけさのみに  
しみてや聞え侍らん。

二十九番 里初雁

左 持

皆江

夕月のかけほのかにも鳴わたる声をよし野の里の初かり

右

嘉樹

月しらむ伏見の里の里ちかく朝霧かくれ初かりのなく  
芳野のゆふへふしみの暁、所からいつれをけしきのまされり  
ともみわきかたくこそ。

三十番 駅路霧

左 持

芳洲

龜山の森の下道霧ふかみ旅行人やわけまとふらむ

右

千竹

こゝろなのあしたの霧や逢坂の駅路見ても行まし物を  
このつかひ、さはかりの手きはも侍らす。おなしほどの哥な  
るへし。

三十一番 深夜擣衣

左 持

知愛

小よ砧更たる月にして打やよその寢覚はおもはさるらむ

右

穂立

月さむき寢覚の里のから衣打音高し夜や更ぬらむ

左、深き夜のね覚の枕に、きぬたの音を聞わひたるさまをよ  
くもいひとられては侍れと、ね覚はとあるは、をといふへき  
にやとおもはれ侍り。右、月しつかなるに、砧の音のふけわ  
たりたるこよなうみにしみては聞え侍るものゝ、ね覚の里の  
とあるは、にとこそいはまほしけれ。ともに申むね侍れは持  
と申置てん。

三十二番 菊花暁香

左 持

万寿子

ふしともるかせはいとはし暁の袖ふくことに菊のかそする

右

竹弘

世のちりはまたうきたゝぬあかつきの枕にかをる白菊の花  
風もいとほしなど、其香をめていつくしむ心あさからす。暁  
しつかなるに、まきれぬにほひのさやかなるもなつかしくか  
た／＼おなしほとのかをりにや侍らん。

三十三番 古寺紅葉

左

万寿子

もみち葉のいろはむかしにかはらねとさてもふりにしこのみ寺かな

右 勝 柏子

あれはてゝふりし野寺のみ仏を秋はもみちのにしきをそきる

左、さゝはるふしもなけれど、又ことなるふしもみえ侍らす。

右、あれたる野よりもみちのちりかゝりたらんさまをめぐらしうつゝけられたれば勝とこそ申侍らめ。

三十四番 初冬朝

左 持 皆江

朝戸出の衣の数をましてたに猶袖さむき冬は来にけり

右 千竹

我門のまへの板はし霜白し今朝より冬はわたりそ来けむ

左、かならずあるへきさまをうまくいひとられたり。右、またえんの詞もてことよくつゝけられたる。かた／＼申むねも侍らす。よろしき持なるへし。

三十五番 荒屋時雨

左 芳洲

中々に木の葉降りつむわか宿はしくれの雨もゝらぬ也けり

右 勝 穂立

野分してあれたるまゝの板ひさしつくるはぬ間にしくれ来にけり

おのつから木の葉もてふきそへたる軒は、をかしうはみえ侍れと、野分にあれたるをさなからふきあへぬ間にあわたゝしき時雨のおとして、時のうつり行をおとろかしたるは、一きは心ふかくや聞え侍らん。

三十六番 橋落葉

左 孝儀

あらし吹みねのもみちは散そめてにしきをわたす谷のかけはし

右 勝 千竹

わかやとの榎かもとの棚はしにつもれるちりは落葉也けり

左、いさゝかさゝはるふしはみえ侍らねと、下のつゝき耳なれたるかたにや。右、榎かもとの棚はしは、あたらしうかけわたされて色ふりたらん。錦よりは中々めつらしうこそ。

三十七番 竹林霜

左 かち 孝儀

村すゝめねくらをいつる声さむし竹のはやしに霜やおくらむ

右 磯子

すゝしやと夏は思ひし呉竹の林の霜そわきてさむけき

たちならひたる林のしも、いつれかふかゝらんとおもひくらへ侍るに、すゝめの声のさえわたりたるかた、一きは身にしみてや聞え侍らむ。

三十八番 松下寒草

左 知愛

松にふく朝かせさむししとゝ鳴岡のかやはら霜ふかくして

右 勝 竹弘

山まつのとせのかけにおふれとも霜にはあへすかるゝ草かな

左、一首の上をかしうは聞え侍れと、此題は松のかけなる草のさまをいふへきに、かや原の霜のけしきを詮によまれたるは、かひなきこゝちす。右は題意たしかにうこくへくも侍らねはるなうかちたるへし。

三十九番 河氷

左 勝 宗肅

淀川の浅瀬のなみは音絶て氷に舟のゐさる夜はかな

右

嬉しやな老のかけさへ見えぬまで氷果たる加茂の河みつ

左、淀川の浅せのさま、けにかゝるへくこそこはかの夜舟にものりなれたる人のよみ出られけん、とおもひやられ侍り。

右、東山隠者の心をくみてめつらしう巧にはよみ出られたれと、初五なつかしからすや、此詞俊頼朝臣顕昭などのよまれし例も侍れと、いと／＼いやしきよしははやく其きた有事に侍り。されは、うちつけなる夜舟のつなてに心ひかれ侍りてなん。

四十番 寒夜月

左 勝 皆江

雪ふかき北山あらし吹そひていよ／＼さゆる冬のよの月

右 竹弘

大空はさゆる嵐の音すみてむかふもすこき冬のよの月

右の初五大空にとあるへきを、はといはれたる、下にうちあひかたくや。されは、いきほひある北山あらしにはけおさるへし。

四十一番 泊千鳥

左 勝 知愛

磯ちとり涙かたしく浮寝ともしらてまくらの上に啼らむ

右 柏子

須磨よりやかよふちとりの声ならん明石の浦に舟はてゝきく

左、しらへとゝこほりなく上下うちあひて旅泊の情やるかた

なきまてかなしう聞なされ侍り。右、三句にこそならんといひをさめたるには、末のかた、いさゝか事たらぬこゝちし侍るにや。されは、左のかいなてならぬ姿にくらへてはいたくおとれりとこそ申へけれ。

四十二番 旅宿霰

左 持 万寿子

さらぬたに旅ねの床のわひしきに心くたけとふるあられかな

右 満春

旅人の飯もるやとの椎の葉に夜すからさえて降あられかな  
たひねの床に心をくたくらん、音さもこそと聞え、旅人の飯もらん椎の葉をよたゝ打しきるらんもまた、よそに聞すてかたく、左はわひしく、右はあたらしくとり／＼なる霰のおと  
いつれとまされりとも聞さためかたくこそ。

四十三番 連日雪

左 持 嘉保

下折の竹の響も絶はてゝ日数つもりぬ庭のしら雪

右 磯子

村すゝめ声しつまりてけふも又ふりのみつもる庭の白雪  
下をれの竹の林にむらすゝめのかいひそみて、声たにたてす、いと／＼しつかなる連日の雪、いつかたかふかゝらんと右に  
左にかへりみ侍れと、さらに其けちめみえ侍らぬにや。

四十四番 歳暮

左 勝 豊苗

たらちねの老行事を歎く子のこゝろもしらてくるゝ年かな

右 嘉樹

おこたりをひと日／＼とかそへきてことしも果に成にけるかな  
たらちねの老まさるらんをなけきたる、いかにもさることゝ  
かなしうこそきゝなされ侍れ。又我おこたりを思ひせめたる  
も、心あさからすは侍れと、かゝる趣はやくいひふりたり  
ともおほえ侍れは、いとせめておやをおもふまめなる心にひ  
かれて、左を勝と申侍らん。

四十五番 寄風恋

左 持 嘉保

玉簾のをすのゆらきに見てしよりにかせなつかしく成にけるかな

右 嘉樹

思ふ事いかにたくへむ朝な夕な妹かかたにと風はふけとも  
をすふかくこもれる姿をゆくりなくほのみせしより、其風の  
なつかしう思ひなさるゝなん、さこそときこえ、妹かゝたへ  
と吹風なからことつてんよしなきをなけられたる、いつれ其  
情おなしほとに浅からすこそ。

四十六番 寄煙恋

左 持 万寿子

いかにせむむねのけふりのきえやらてむせふばかりに物思ふ身を

右

今ははやふしの煙はたゝすとも思ひけぬへきこゝろならめや  
諸ともにおもひこかるゝむねのけふり、おなしほとに立のほ  
りて、いつれをもえまさるともみわきかたくこそ。

四十七番 寄木恋

左 かち 皆江

いかにせんちつかたてたるにしき木のいたつらにしてくちも果なは

右 満春

うもれ木のうき名はとらし名取川ふかき思ひに身はしつめても  
左、一むきにとゝこほりなくいひくたされて、まをすむね侍  
らす。右、さるえんの詞もて、事よくつゝけられたるかひな  
ての哥とは聞え侍らねと、末のかた、身はといはゝしつみて  
もと、うくへきをしつめといはれたるあたり、申むねに侍れ  
は、難なきに任せて左をかちとす。

四十八番 寄草恋

左 孝儀

いかなれはかく恋草のしけるらん人の情の露もかゝりて

右 勝 穂主

我恋は花野にまじる鬼あさみ時めく春もつまれさりけり  
左、人の情の露たにもかゝらぬを、なとかはり恋草のしけり  
行事そと打なけきたる心ふかくは聞え侍るものゝ、一二の句、  
わか恋草とみひとつに掛けていはゝ、又一きはなるへきこゝ  
ちす。右、さる草をつみ出られて、いとめつらかにしたてあ  
けられたる、なみ／＼ならず聞え侍れは勝とこそ申侍らめ。

四十九番 寄鳥恋

左 持 宗肅

中々に鳥の八声そまたれけるこぬ夜としりてひとりねつれば

右 千竹

うなひ子かかふ籠のかれしてりうその行へしられぬ恋もするかな



今はこしとおもひさためて明るをいそく心も、さるへくはな  
ちとりの行へしられぬに、我恋の末をおもひやりたるも、あ  
はれにとり／＼申むねなきには勝まけのさたなしかたくや。

五十番 寄獣恋

左 かち

豊苗

のる駒のすゝむ心もあはれ也妹かりかよふ道をしりつゝ

右

千竹

道草にとゞめられてやこさるらむいてしとはきく夕かけの駒  
左、よひ／＼かよひなれて、道いそく駒のこゝろさへいとあ  
はれに聞なされ侍り。右、趣はをかしけれど、二三の間に君  
はなといふ事なくては、たゞに駒のみの事かとも聞え侍るへ  
し。されは、駒たになつまぬ左の道まとふかたなくや侍らん。

五十一番 寄虫恋

左

知愛

秋かせにやかてけたれん夏むしのはかなく物を思ふ比かな

右 勝

磯子

ひとすちに思ふかひなくさゝかにのいとはるゝみそわひしかりける  
人の心のかはりやすさにやかてあかれやすらんと、夏むしに  
よせて行末をおもひはかなみたる心あさからすは聞え侍れ  
と、いとほるゝ身のわひしさをくもの糸の一すちにゆるふか  
たなく、つゝけられたるは、一きはちからありとやまをさむ。

五十二番 寄鏡恋

左

嘉保

たらちねのかたみの鏡思ひきや恋の涙にくもるへしとは

右 勝

面かけのうつりやすると手にとりてみれば思ひのますかゝみ哉  
左、さるかたに意をかしうよみ出られたるを、末のかたくも  
らすへしとは、とやうにいにはは事たかひ行か。右、心あき  
らかにしてくもりなきかゝみ成へし。

五十三番 寄衣恋

左 かち

豊苗

袖もまたかはしあへぬをから衣何にうき名の世にはたちけむ

右

竹弘

たまにたにあふよしなくは小よ衣うらみてのみそ恋わたるへき  
左右とも、えんの詞もて、よく仕立あけられたる。其たけも  
さはかり長短なくはみえ侍れと、右の初五まれにたにとある  
へきをたまにたにといはれたる、いかにそや聞え侍れば、左  
の衣にはたちちおくれたりと申へし。

五十四番 寄枕恋

左

芳洲

今はたゞまてととひこす成にけりあはれと思へ聞の小まくら

右 勝

柏子

夢にたにあはれとは見よ敷たへの枕のちりのつもる思ひを  
左、心はさるものから、末のかたにふと取出られたる枕さは  
かりの詮なくや聞え侍らん。右、もとすゑうちあひていさゝ  
かたちろくかたもみえ侍らねは、勝ともかちたるへし。

五十五番 潤雲

左 勝

孝儀

白雲のとはにかゝれる谷の戸やうき世へたつる所なるらん

右 柏子

やかて又雨とやならむ峰高くのほるにしるき谷のうき雲

左、谷のとをとちて世をへたてたらむ、さもやといと淋し。

右、谷間よりむら／＼のほるをみて、あらかしめ雨ならんとおもひやりたるも必あるへきけしきながら、しらへにつきては左の雲たちまさりてや聞え侍らん。

五十六番 古城蹟

左 宗肅

古兜掘出し見れば山畑のこの片岨をとりてなりけむ

右 勝 嘉樹

大城門のあとの石垣くち果てあれし茅原に秋かせそふく

左、兜をほり出て、とりてのあとをしりたる、まことにさるへき所とおほえ、ちはら吹風に昔のかけをおもひやりたるも、すゝろかなしう、左右とり／＼なる中に、左の片岨もとあるをきけは、其あたりこゝもかしこもとりてのおほくありしやうに聞ゆへくや、さる所あらはありもすへけれど、うちまかせてはいかゝにやと、おもはれ侍り。されは、秋風のさひしき気さへそひたるかた、あはれふかゝるへくや。

五十七番 故郷道

左 勝 豊苗

昔我ふみし跡とも見えぬかな草にうもるゝふる郷の道

右 満春

古郷の小野の細道ほそけれと絶すむかしのあとには有けり  
右、三句より下、昔のあととはかくれさりけり、とか又はほそ

きながらに昔のあととはたえせさりけりなとやうにつゝけまほしくや。左、上下よくおしとほりて申むねも侍らねはかちたるへし。

五十八番 水郷煙

左 持 知愛

舟よはふ声をのこして神崎の里わのけふり末暮にけり

右 嘉保

朝煙苦のうへまてなひく也伏見の里に舟や果けむ

神崎のわたりの夕のけしき、うちむかふこゝちし、うちなひく煙をとまのひまよりうかゝひみて、はやく伏見につきぬとおもへるさま、又実景にしてかた／＼あしからず。おしくらへてよろしき持とや申置てん。

五十九番 山家夜話

左 持 芳洲

松かせの音静なる山窓に更るもしらてかたる夜はかな

右 磯子

ともし火はかたへになしてつま木折柴をりくへてかたる夜半かな  
左は、さる隠者かとおもはれ、右は山かつのわひしきとちとしられ侍り。かた／＼人の品はかはりたれとも、かたる心のうちとけたるはおなしかるへくこそ。

六十番 睡鶴

左 かち 孝儀

打ねふる鶴の姿そのとかなるかくてやへなむちよも八ちよも  
右

雪の上にとけてねふれるあしたつの夢いかはかりのとけかるらん  
左、千代へんたつのうちとけてねふれるさまのとかなるしら  
への上にもみえ侍り。右、又あしたつのあしからす、下のか  
たわきてしらへさはやかに聞え侍りて、左におとるへくは侍  
らぬを、初五雪の上になとなとやうの意あらまほし。さるま  
をすむね侍れば勝は左と申置てん。

六十一番 林間煮茶

左 嘉保

打かこむ松にのこれる有明のかけかをるまでになる木のめかな

右 かち 満春

呉竹のはやしの落葉かきよせて世をわひしらににるこのめ哉

左の松かけ、右の竹むらともにさひしきを味ふ宿とはみえ侍  
れと、左の初五立かこむといふへきを、打かこむといはれた  
る、いさゝか申むねにや侍らん。されは、右のかけにこそ心  
をよせ侍らめ。

六十二番 月下読書

左 勝 万寿子

ともし火のかけ細しとて見る文にてりそふ月は心ありけり

右 千竹

さやかなる月にひらきてみる文の道なとやすくゆかれさるらむ  
窓にさしきてみちひきかほなる月をうれしみ、又あかき影に  
てらしみても、心のたと／＼しきをなけきたる。ともにつと  
めいそしむおなし心のほと、あなめてたところ申置侍らめ。

六十三番 孤舟夢

左 宗肅

月まちてねふる入えの夕なみに夢もなかれてゆく小舟哉

右 勝 穂主

うきねする夢そはかなき堀え川つなく小舟の友なしにして

左、趣たゝならすをかしうはよみなされたれと、わざと月を  
まちてねふるといふあたり、ことやうにや侍らん。又ちかき  
人のよめりし、あしの一葉の夢そなかるゝといふに、大かた  
かよひ侍るも口をしくや。右、堀えのあしのさはるふしも侍  
らねは、勝とまをしてん。

六十四番 貴賤祝言

左 持 嘉保

おしなへて君か八千世をいはふかな高きいやしき品はあれとも

右 竹弘

位山高きひきゝの品はあれと恵みはおなし君か御代かな

たかきいやしきおしなへて君をいはひ恵みをかしこむ心あ  
きらかにいとよろしき巻軸のつかひなるへし。

かくまをしこゝろみては侍るものゝ、おろかなる判者かし  
かもとみのしわさに侍れば、みたりかはしき事のみおほか  
らんを、しれたる翁かなといたくなとかめ給ひそ。

松根

勝三

持二

負三

勝二	持三	勝五	持一	負二	勝二	持三	負三	勝二	持四	負二	勝二	持四	負二	勝二	持四	負四	勝四	持一	負三	勝四	左
芳洲		豊苗			知愛			万寿子			皆江			嘉保				孝儀			

勝一	持三	勝三	持三	負二	勝五	持二	負一	勝三	持三	負二	勝三	持三	負三	勝二	持三	負一	勝二	持四	負二	勝二	右
満春		竹弘			穂主			磯子			柏子			千竹				嘉樹			

勝一	持五	負二	勝一	負三
	宗肅			

負四

(佐賀県立図書館所蔵伊杉 19-10255)

④『三十六番詠草合』

表紙（左肩）「三十六番詠草合」

（右下）「小車社」

一番 露

左 持 維足 吉武来助

しはらくは露の玉のをゆらくらん秋かせたえぬ宮城のゝ原

右 宗肅 村崎卜斎

しめちとる袖ぬれにけり谷かけは木下露の昼もちりつゝ

吹風を置しつめたるも、袖にみたるゝもいつれをかしき所の  
さまにこそ。

おのかしゝむすふもちるもしらつゆのこゝろやおなし  
こゝろ成らむ

二番

左 嘉樹 城島又八郎

夕されは枝のいよ／＼たわむ也置露しけき庭の萩はら

右 勝 正熙 徳見逸作

くむ袖のさはりて今朝もこほれ鳧みつゝのものと萩の上の露

左、二三のあたり、いさゝか心ゆかすや聞え侍らん。趣もま  
たふりたるかたにや。されは、

めなれたる庭よりもけにをかしさはつゝゐのものと萩  
のはな

三番

左 勝 孝儀 江口大五郎

月影のやとるを見れば浅ちふの露こそ秋の光なりけれ

右 通清 下村武左衛門

置わたす浅ちか露は秋の夜を鳴あかす世のなみた成らむ

ともにあしからす聞ゆる中に、

てる月のかけさすかたやまさるらむおなし浅ちのつゆの  
光を

四番

左 勝 豊苗 緒方喜兵衛

秋の野の花の筵は朝夕の露の玉しく処也けり

右 竹弘 杉野伯耆守

おけはかつなひきこほれて浅ち原夕の露そかせにひまなき

右、二三のわたり、いひかなへたる詞ともおほえ侍らす。さ  
れは、左のかたとそ申侍らん。

吹かせにことのはさへやみたれけんしとろにみゆる浅ち  
ふの露

五番

左 持 芳洲 中島太郎

啼むしの声しめりても聞ゆ也浅ちか露や置まさるらむ

右 嘉保 城島与四左衛門

千草咲野へいかならむ我やとのあさちか庭のけさの白露

左右ともに、

さひしさもおなし浅ちか庭なれば露もこゝろをわけす置  
らん

六番

左 勝 信之 鶴丸兵右衛門  
朝な夕なかせの絶間を命にてち草に露の玉はしくらむ

右 穂主 古川源太郎

朝つく日さすかけおそき岡越の小笹の露のさむくも有かな

右 哥、朝附日さすかけおそき、とありて小笹の露のさむくも  
などうかけたることに、をかしうしたてあけられたり。さるに、  
三四の間に道といふことなきは、をしむへき事ならずや。さ  
るふし侍れは、左のかた姿はいたくおくれたれと、しはらく  
かちとや申置侍らん。

生しける小笹に道はうつもれて旅行人やわけまよふらむ

七番 霧

左 勝 嘉樹 城島又八郎

夕けたく煙もともに立そひて秋霧ふかし宇治の川つら

右 穂主 古川源太郎

渡舟よふ人もなし朝霧にあけてもくらき神崎の里

ともにけしきありて聞え侍り

右 ひとりたちもおくれぬきりならん神崎のさとうちの河  
つら

八番

左 持 信之 鶴丸兵右衛門

夕日影うすれて寒し山里は霧の雫に打しめりつゝ

右 嘉保 城島与四右衛門

ほの見えし蟹のいさり火暮そめて薄きりなひく沖つ島山

夕日かけのよわりたるも、いさり火のくれそめたるも、とも  
にあはれならずやは。

足曳の山へもかなし蟹かすむ浦わもさひし秋の夕くれ

九番

左 持 維足 吉武来助

秋霧の立そめしより巻向のひはらのくもりはるゝ日もなし

右 通清 下村武右衛門

ゆきなれし柴人たにもまとふらむ夕霧ふかき岐岨の山道

左、檜原ははるゝ日もなしとのみにてもあらまほしきこゝち  
す。右は、岐蘇の山みちならんには上のかた旅人などいふへ  
くもや。今はよにひらけたる道なれは也。柴人とあらんには、  
山のかげ道などそ似つかはしからん。

霧こめていつれとわかんかたそなきひはらの右もきその  
山ちも

十番

左 持 芳洲 中島太郎

見わたせは紀路の遠山霧立ていよゝゝ遠しきちの遠山

右 正熙 徳見逸作

終夜ふりし余波をうき霧にのこして雨はけさ晴にけり

左は、さら／＼としらへおろされたり。右は、けしきをよく  
いひとられたり。ともにあしからず。

打むかふ所からにや秋きりはかゝるもをかしはれたるも  
よし

十一番

左 豊苗 緒方喜兵衛

親したふ子さるのむせふ声す也楨たつ山の秋の夕霧

右 勝 宗肅 村崎卜齋

渡舟よふ声はして朝月夜しらみかねたる秋の河きり

左、あまりにめつらしきさまをと思ひめぐらされたる中に  
けおくれてや聞え侍らん。さる上にむせふ声は声むせふと  
らうへにいふへくや、ともおもはれ侍り。右は、うちむかふ  
こゝちし侍り。

山ふかくなひくとすれと舟よはふ河辺のきりや立まさる  
らん

十二番

左 勝 孝儀 江口大五郎

橋わたる沓の音のみ聞ゆなり鴨の河原は霧ふかくして

右 竹弘 杉野伯耆守

長柄川朝きりくらし舟人の棹さしまよふ声はかりして

右、趣は侍れと棹さしまよふ舟人の声はかりしてとやうに  
つゝけまほし。左は、沓のおとまきるへくもあらず。

水棹とるひゝきもあれと橋わたる沓のおとこそたかく聞  
ゆれ

(別紙)

左

橋渡るくつの音のみ聞ゆなり鴨の川原は霧深くして

右

長柄川朝霧くらし舟人の棹さしまよふ声はかりして

左、頭胸二句のつゝき、かくては沓の橋わたる如く聞ゆ。又  
腹句の鴨川原の原の字あまれり。橋は川にこそわたせ、川原  
にはわたさず。

右、腹句の棹さしまよふ声といふこと、いかなる声ならむ。  
おほつかなし。されは、さしまよふ棹の音はかりしてと末句  
をあらたむへし。しかせは歌から左にまさりぬへきか。

十三番 月

左 維足 吉武

こゝろなきうさきか友も立いて、園原山の月を見るかな

右 勝 嘉保 城島与

さはるへき山の端もなき武蔵野にあまりて見ゆる月のかけ哉

左、兔か上をいふ意なれば、末の見るかなとあるは、あまり  
いひすゑたりとや申へからん。

おなしくはさはるかけなき武蔵野にいて、そ秋の月はみ  
てまし

十四番

左 嘉樹 城島又

今はとていねむとすれと月かけは更ていよ／＼照まさり鳥

右 勝 宗肅 村崎

さやかなる野へ行かへり鳴むしの声よわるまで月を見るかな

左、二の句なつかしからぬこゝちす。ねなんとすれと、など  
もやいふへからん。さる申むねも侍れは、  
てる月は所わかねと虫のねのそひたるかたやあはれ成ら  
ん

ん

十五番

左 持 豊苗 緒方

思ふ事いはぬこゝろは袖の上のなみたにやとる月そしるらむ

右 穂主 古川  
雲もなきみとりの空にのこりけり野分の後の在明月

左は、心ふかく、右は、さやか也。さていつれかまされると、  
ふたゝひみたひかへりみれと、心まとひていつれともさため  
かね侍るあまり、衆義にもかけ侍れと、たれも／＼おもひま  
とはるゝにや、これをともいふ人なければ、  
右左事もこゝろもかはれともてる月かけはひとつなるら  
ん  
ともやいひ置侍らん

十六番

左 持 芳洲 中島

わか宿の軒の松かせ音更てかたふく月のかけのさやけさ

右 通清 下村

八千艸の露の玉をもみかくらむ野へさやかなる秋夜月

左右ともにさやかなる月の光にこそ

あはれなり軒のまつかせおとすみて野のへのつゆにふく  
る月かけ

十七番

左 信之 鶴丸

立いてし月中空に成にけり今はさはらむ山の端もなし

右 勝 竹弘 杉野

初かりの声さへそひて照月のかけのあはれもふかき夜はかな

左、けにさはる物はみえ侍らねと、またをかしきふしもみえ  
侍らす。されは、初かりの声の一ふしそひたるかたにや侍ら  
ん。

かゝらはとかねておもひし初かりの声を月夜に聞かうれ  
しき

十八番

左 持 孝儀 江口

秋はたゝ夕はかりと思ひしに更てそ月に袖ぬらしける

右 正熙 徳見

衣打音もさやけし更科の月は高ねを立はなれつゝ

夕はかりとおもひしにといへらんには更ても猶なとやうの  
意あらまほしくや。右、また高ねを月の立はなれたれは、い  
よ／＼衣うつ音のさやけしなとやうの意こもらまほし。かた  
／＼あしからぬうちに、いさゝかつゝ申むねなきにあらねは、  
袖のつゆきぬたのひゝきかた／＼に秋のあはれはかはら  
さりけり

十九番 雁

左 維足 吉武

きぬた打里わをかけてなひくなり秋も夜さむの衣かりかね

右 勝 穂主 古川

初霜のおくてそよきて小山田の朝かせさむみ雁は来にけり

左、里とのみにてもあるへくや。又末のかためつらしとも聞  
え侍らす。右は、申むねなく聞え侍り。

吹わたる朝風さむみ小山田のおくてをかりの声そみにし  
む

二十番

左 孝儀 江口



ちきりあれはことしも雁の玉章をかけてそわたる夕暮の空

右 勝 嘉保 城南与

筑波ねのねこしのかせになひきつゝ麓の田井に落るかりかね

左、あまり事たしかなるにや。右は、趣も詞もたらひたる哥なるへし。

筑波ねのねこしのかせのたかければかきおくれたるかりの玉札

廿一番

左 勝 芳洲 中島

木にいてゝ野への尾花のまねけはかおもひ立ても雁は来にけむ

右 勝 竹弘 杉野

みか月のかけやいつこの山の端にむかへはわたる雁のひとつら

左、おもひたちでもとあらんには、上をまねくによりてとやうの意にいひなすへくや。まねけはかといはゝ、雁はきにけんとのみにて、事たりぬへし。右、秋夕のさま身にしみて聞え侍り。

みか月のかけにこゝろそひかれけるをはなかそてはうちまねけとも

二十二番

左 勝 信之 鶴丸

ゆく末も見るへき物を一むらの霧にわけいるあまつかりかね

右 宗肅 村崎

越にある脊子か旅ねを思ふ夜にきくはかなしき初かりの声

右、雁は越ちよりわたりくといへるによりて、初五はおもひよられたるならめと、さもよくいはれたりとはおほえ侍らす。

左は、申むねなくや。

旅にしてかなしかるへきかりかねのなときはかりは聞えさるらん

二十三番

左 勝 嘉樹 城島

入相のかねの絶間に聞ゆなり夕霧かくれわたるかりかね

右 通清 下村

難波えのあし吹わたる風さむみ衣かりかね今そ啼なる

右、二三の句、応徳の歌合に、朝とあけ衣手さむくうちみれは、とある哥を判者通俊朝臣の、ものいひさしたるやう也、との給ひしに、ほとゝ似たるつゝけさまにや侍らん。左は、入相の音の絶間にもいひまほしけれど、かうやうにもいひなれたるかとおほゆれば、姿よろしきにつきて左と申侍らん。あはれにも聞えける哉入相のおとのたえまのはつかりのこゑ

二十四番

左 持 豊苗 緒方

浦かせのさむき夕に聞ゆなり塩やく蜚の衣かりかね

右 正熙 徳見

うき霧に夕日しつみて蘆屋瀉かり鳴空はかつ暮にけり

左右、おなしたけの哥なるへし。

淋しきはいつくもおなし浦なみの立もおくれすたちもまさらす

二十五番 鹿

左 芳洲 中島

露さむき秋の夜比は鹿の音に物やかなしき宇治の山人

右 勝 穂主 古川

真萩ちる夜さむのかせを身にしめてをしか鳴なり宮城野の原

左もあしとには侍らねと、右のかたことに立まさりてこそ聞  
なされ侍り。

真萩ちる野風をさむみ鳴しかの声そみにしむかきりなり  
ける

二十六番

左 豊苗 緒方

秋更てもみち葉なかる立田川なみのよる／＼鹿そ啼なる

右 勝 嘉保 城南与

まさき散外山のあらし暮そめて鳴音かなしきさをしかの声

左、鹿は河中にあるかとおほめかれて、ことさまに聞え侍り。

右、いさゝさか申むねも侍らす。めてたき哥なるへし。

聞人のこゝろさへにやみたるらんあらしにまよふさをし  
かのことゑ

二十七番

左 信之 鶴丸

小夜更てむかしの秋を忍ふかな鹿の鳴音にめを覚しつゝ

右 勝 通清 下村

さをしかのことゑのあはれに聞ゆなり峰の木の葉も今やそむらむ

左哥、かの山里は秋こそといへるをもとゝせられたるなるへ  
し。さらば、上のかたわひしといひけん昔人の心をしのふと  
やうにいひなさまほし。昔の秋とのみにては、あまり大やう

にや聞え侍らん。右哥、よしとまては侍らねと、左にはまさ  
りぬへし。

木々の葉もやかてにははん山のはに鳴しかのねやあはれ  
成らん

二十八番

左 嘉樹 城南又

小山田のかりほの軒に月かけの更てきこゆるさをしかの声

右 勝 竹弘 杉野

立こむる霧にをくらの山かけは昼もをしかの妻やこふらむ

左もあしからすは侍れと、右、きりにをくらのといひ、ひる  
もをしかのとつゝけられたるわたり、ことに手際ありて、な  
へての哥ならず聞え侍れは、右にはいたくまされりとやまを

さん。

はれやらぬきりにをくらの山かけの秋こそことに淋しか  
りけれ

二十九番

左 維足 吉武

ともしせしさつ男も袖やぬらすらむ小倉の山のさをしかのことゑ

正熙 徳見

秋ふかきみ山おろしを枕にて聞ぬ夜もなしさをしかの声

この左もまたあしからす。されと、右哥うちきくやかてみに  
しみ侍るは、ことにめてたき哥なるへし。

鹿のねをあらしのさそふよひ／＼のね覚やことにかなし  
かるらん

三十番

左 孝儀 江口

こと更に淋しかりけり秋の夜のふけて妻とふさをしかの声

右 勝 宗肅 村崎

月更し山田の庵に寢覚して聞夜かなしき棹鹿のこゑ

左、一わたり聞えたるのみの哥なるへし。右は、姿詞たらひたれはをかしうも又かなしうも聞え侍り。

露のみか月のかけさへもりそひて小田もるそてやぬれま  
さるらん

三十一番 紅葉

左 信之 鶴丸

枝かはす檜原か奥のこきもみち人もきて見ぬにしき也けり

右 勝 正熙 徳見

もみち葉をちしほにそめて小くら山みねの時雨も御幸しつらん

左、こきもみちといへる詞、耳にさはり侍り。もみちはゝとありてこともなかるへきをや。右は、申むねも侍らす。

みゆきまつ小くらの山のもみちはのにしきそことにたち  
まさりける

三十二番

左 持 嘉樹 城島又

山本のきりの絶間に朝附日にほふもまたててるもみちかな

右 嘉保 城島与

墨そめの夕日にほひてもすのゐるはしの立枝は紅葉しにけり

左右、ともに申むねも侍らす。

朝夕の日かけにほふもみちはゝいつれおとれる色とし

もなし

三十三番

左 持 維足 吉武

打なひく霧の絶まに里みえて一むらはやし紅葉しにけり

右 竹弘 杉野

いく度かしくれの雨のそめつらむ柞のもみちいろや薄しと

左、三四のあたり、絶まにみゆる里の一むら林とつゝくへきか。さらすはみえわたる一むら林などもやいふへからん。右は、染つらんとあらは、下はかはかり紅葉の色の深きはとやうにうくへきこゝちす。かた／＼申むね侍り。

きりしくれおよはぬかたやましならむむらこに色のみゆるもみちは

三十四番

左 孝儀 江口

秋霧の立田の山を見わたせば木末はなへて紅葉しにけり

右 勝 穂主 古川

夕附日しくれて暮し山の端に猶てるかけやもみち成らむ

左、初二あまりいひふりたるつゝきにや。されは、

ことのはのにほひもそひしもみちはゝくれても色そさや  
けかりける

三十五番

左 勝 豊苗 緒方

吾妹子か袖ふる山の初もみちこれやめにたつ錦なるらむ

右 通清 下村

このまゝに常盤ならなむ立田山から紅にそむるもみち葉  
左右の山をみくらへ侍れは

ことさへくからくれなるの色よりも大和にしきの袖そゆ  
かしき

三十六番

左 持 芳洲 中島

いつの間にしくれそめけむ足引の山のもみち葉いろにいてにけり

右 宗肅 村崎

立田山夜さむをいそくこの比の雨に木末は色つきにけり

かたわかすしくれの雨や染つらんおなし色なるみねのも  
みちは

年過る比よりくるゝをかきりにあわたゝしう判しをへ侍れ  
は、聞ひかめたる事のみこそ侍らん。さはさるかたにみゆる  
し給へ。

九月四日

松根

左

勝二  
持二 嘉樹  
負二

右

勝三  
持三 嘉保

勝二

持二 豊苗  
負二

勝三

持二 宗肅  
負一

勝二

持一 信之

負三

勝二

持一 孝儀

負三

持四

負二 芳洲

持三

負三 維足

勝三

持二 穂主

負一

勝三

持一 竹弘

負二

勝二

持三 正熙

負一

勝一

持一 通清

負四

(佐賀県立図書館所蔵伊杉 19-10493)

⑤『七十二番詠草合』

表紙 (左上) 「七十二番詠草合」

(右下) 「小車社」

一番

左 持 老人 宗肅

いとほるゝ老を思はて人こゝろうとく成ぬとみをなけく哉

右 杖 豊苗

いはけなき時は馬にもせし竹を杖につくみと成にける哉

左右ともに趣をかしうつゝけられて申むねも侍らす。さて哥合の一番は古より大かた左をかちにさたむる事とも承り侍れは、猶いかにやと、立かへり老のかしらをかたふけ、竹杖のつく／＼と考へ侍れと、右のかたおとるへうもみえ侍らねは、よろしき持とこそ申置侍らめ。

二番

左 勝 嘉保

物ことにおくれ行みもこしかたを忍ふなみたはさきたちにけり

右 穂主

身をすかりつく竹杖の一本は老の坂ゆくたすけ也けり

左、おくれ行といひてさきたつとうけたるわたり、よくおもひよられたり。右、又あしからねとみをすかるといへるわたり、いさゝか心ゆかす。取すかるなとやうにあらまほしき心地す。されは、左にはおくれたるにや。

三番

左 勝 正熙

うとまれて死んおもへは老か身のありてかひなき此世也けり

右 維足

あはれわか老の杖とそ成にけるそれとはうゑぬ窓の呉竹

左、をかしうつゝけられたるわか老の心にもおもひあはせられてあはれにこそ承り侍れ。右は、下のかたそれとはうゑさりしとやうにあらまほし。さるむねあはれは、左とや申侍らん。

四番

左 持 竹弘

若かりしその世さへこそしのはるれみにつもりたる老をなけきて

右 孝儀

呉竹のちよをこめつゝきる杖は老の坂ちにつくへかりけり

左右ともにありのまゝにて、させるふしもみえ侍らす。

五番

左 持 嘉樹

老ぬれはおくれかちにも思ふ哉わかゝる人をうらやまれつゝ

右 芳洲

老かみをたすくる松の一よつえこれやちとせの坂はこゆらん

左、上のかた同事もおくれかちに成行につけてとやうにいひて、下をうらやまれけるなとそうくへくや。右、又下のかた、これをもてちとせの坂はこえなんとやうにいひまほしき心ちす。左の上、右の下、かた／＼心ゆかねはおなしほとこの哥なるへし。

六番

左 勝

信之

身に老のつもり／＼て文机のちりふくいきもよわりつる哉

右

通清

たらちねの親のいさむる一杖にこゝろはちゝにくたけつるかな

右、かくても聞えはすへけれど、二三のあたり、親のいさめの有体にいひなしてもよからんとまとはるゝふしもみえ侍れは、左のめつらしういひなしたるには、いさゝかおくれたるにや。

七番

左 勝

通清

いつとなくかしらに雪のつもれるはつもれる老のしるし也けり

右

嘉樹

あけ巻か庭のさゝ竹杖にきりて終には老の坂につくらし

右、あけ巻かつえを切といふ、其理なくては聞まどふかたあるか上に終には老のといへるあまりほど遠きこゝちす。左は、雪といひてつもれる老のなと、よくうちあひてをかしうこそ聞なされ侍れ。

八番

左 勝

芳洲

つもり来し年の数たにともすれはわすらるゝ迄みは老にけり

右

竹弘

手になるゝ蓬の杖のなかりせは老の坂道いかてこえまし

左、必あるへきさまをおもひよられたり。右もあしからねと、蓬とかきれるわたり、いさゝか心ゆかねは又左と申へし。

九番

左 持

孝義

老ぬれはおひたつこらか行末をたのむはかりそ命也ける

右

正熙

おこたりにいさむる杖の力さへよわれる親の老そかなしき子をたのむ心さこそとあはれに親を思ふこゝろ、又かなしう老のなみたまさしくまれて、かた／＼いかにともまをしさためかね侍り。

十番

左 勝

維足

老てみの昔かたりをたれにせん友は其子の世とかはりつゝ

右

嘉保

植置しみきりの竹を切とりて老行末の杖につくらん

左、又老かみにおもひあはせられてさこそと承り侍れ。右は、老行末の杖になとかねてまうけ置らんもあまり間遠なる心地するか上に切とりてといへる迄は、おのか上とおふる下はつくらんなと他の上ときゝなさる、さるむね侍れは、左にはおとりたりとや申ん。

十一番

左 持

穂主

黒かみの皆ましろにも成ぬるは年よる波やあらひあけゝん

右

宗肅

祝つゝ君か杖にときる竹のふしにはちよのこもらさらめや

左、あしからねとかの俊頼朝臣の哥にならひて、皆しらかともなといはゝ、猶をかしからん。右は、ふしといひよといへ

る、おなしほとこの事かさなりたるかともおもはれ侍れば、持ともや申置侍らん。

十二番

左 勝

豊苗

老かくす笠たにあらはかつきつゝかしらに雪はつませさらまし

右

信之

世の中にたすくる杖のなかりせは老の坂ちをいかて越まし

右、初五老かみをなとあるへきこゝちす。されと、下に老の坂ちといへるに、さしあひ侍れば、せんかたなく世間にといはれたるならめと、さては事たかはぬ心地す。左は、さる申むねも侍らぬにや。

十三番

左 持 ゆめ

嘉保

浦舟のよる／＼かはるうきねには枕さたむるかたなかりけり

右 枕

豊苗

こよひまたいきたなきみをいかにせんよしや枕にうとまれぬとも左哥、よる／＼かはるちきりにはなといはゝまきはしかるましくや、ともおほえ侍り。右、またさしたる際もみえ侍らねは、持とや申置侍らん。

十四番

左 勝

正熙

なかれての末を思はぬひまもなしよるへをなみにまかせたるみは

右

穂主

いたつらに朽果ぬとやなけくらんちりのみつもる閨のこまくら

右哥、まちわふるおのか心のせんかたなさをまくらにもおふせてうちなけくやうの意と聞なされ侍り。さらてはうちまかせてちりのみつもるとはいはるましければ也。さる意ならんには末をねやのまくらも、なといひなすへくやと思はれ侍り。左は、ことなく聞え侍れば右にはまさりたりと申へし。

十五番

左 持

竹弘

よるせなきみをいつまでかなけくらんよひ／＼かはる波のうきねに

右

維足

いてかての月待わひていつとなくかひなをかりの枕にはせしなみのうきみをなけくらん心のほど、さこそとおもひやられ侍れ。右も、必有へきさまをよくいひとられたり。よろしき持なるへし。

十六番

左 持

嘉樹

よひ／＼にかはすまくらのかはる也おもへははかななみのうかれめ

右

孝儀

世の中のうき事をのみしはらくは夢になしてよ閨のこまくら左、かはす枕のといへるあたり、世に浄瑠璃なんといふ物の詞めきて、いさゝかいやしきかたにや聞なされん。右、さるふしはなけれど、しらへくた／＼しき心地せられ侍れば、持とこそ申置侍らめ。

十七番

左 持

信之

女郎花人の心の秋風にやつれ行みの果そかなしき

芳洲

ふたつなきつけの小枕なれも又淋しき閨と物やおもはん

左、よろしうは承り侍れと、ゆめのみにもかきらす、大かたの人の上にもいはゝいはるへくやと思はれ侍り。右は、ふたつなきといふは、ひとりねの枕なれはふたつはなしとの意ならんとは聞侍れと、ふたつなきといふは、大かた又なくたうとふ物にいひなれたれば、聞まどふかたなきにしもあらすと思ふは、わかひか耳かはしらねと、さるかたに持とや申置侍らん。

十八番

左 持

宗肅

よるへなきみをなけきつゝ幾人の袖に涙をこほしきつらん

右

通清

いかにせん来ぬよかさねていたつらにちりのみつもる閨の枕を左もあしからず、右又いひかなへられたり。よろしき持なるへし。

十九番

左

通清

ちきり置人はなけれとよひ／＼に待こゝろこそあはれ也けれ

右 勝

竹弘

敷妙の枕はちりにうもれけりつれなき人を待とせしまに

左心にはしまねとまたもと契おくなんゆめの常なるかともおもふは、あまり今やうの心におもひなすわかひか耳にや。さしきためたる人はなけれとなといはゝ事なかるへし。右は、

さる申むねも侍らすや。

二十番

左 持

芳洲

難波えのきしによるなみよることにかはるうきねやかなしかるらん

右

正熙

うき事をしはしぬるまの夢にたにわすれはつへき枕ともかな左をかしうはつゝけられたれと、四の句かはるちきりなとやうのことなくては、ゆめとも聞きためかたきこゝちす。右、末のかた、わすれはてさする枕もかなとやうにいひまほし。かた／＼申むねなきにあらねは、持とこそ申置侍れ。

二十一番

左

孝儀

小筵に衣かたしきこよひもや柳かゝけに人をまつらん

右 勝

嘉保

小夜まくら物いひかはせいたつらに過し我世の夢かたりせん左、我をまつらんうちのはしひめといへる古哥の上に、一文字もたかはす。右は、さるむねもみえ侍らす。末のかたなとことにをかしう聞なされ侍れば、左のいたきあやまちあるにくらへては、ことにまされりと申へし。

二十二番

左 ち

維足

うはへよく口にはいひてむねあはぬ人にあはするむねそくるしき

右

宗肅

一夜たにそむかぬ閨の木枕をわか思ふ人のこゝろともかな



左、うかれめか心のほどをよくもいひとられたり。右も、あしからずは聞え侍れと、左にはいさゝかおくれたるにや。

廿三番

左 持

穂主

ともすれはまことゝみするいつはりの涙や人の袖ぬらすらん

右

信之

はかられてまつよかさねしはかなさを人になつてそ闍の木枕

右、一首の上にては、人のきたりし夜の事は世の人につくとも、いとほしとやうに聞ゆ。大やう恋は、よにしのふならひなるを、かくては恋の情にかなはずや侍らん。左哥、右よりはいたくまさりたれとも、下のかた、涙に人や袖ぬらすらんとあらまほしきこゝちす。さる申むねなきにあらねは、しはらく持とや申置てん。

廿四番

左

豊苗

ゆく末をちきらんかたもなみ枕うきみのすくせあはれいつまで

右 かち

嘉樹

よひ／＼のちきりたかはて独ねの友とたのむはまくら也けり  
左、上の句にくらへては、下の句おくれたりとみえ侍り。右は、うまくいひかなへられて、申むねも侍らすや。

廿五番

左 持 僧

正熙

世のさまの色にうつらぬをしへとやのりの衣はすみに染けん

右 鐘

豊苗

夢覚し後もしはらく音す也枕の山のあかつきのかね  
左右ともに、申むねもなく聞え侍れは、持とこそ申置侍らめ。

廿六番

左 持

竹弘

色もかもむなしとゞける法の師も花にむかはゝいかゝこたへむ

右

穂主

ほの／＼と松の上葉の霜みえてをのへのかねのおとしらむ也

左、詠はをかしけれど、上のかたにとふ意なくては、いかゝこたへんとはいふへくもあらず、いかゝおもはんなどこそいふへけれ。右は、末のかねの音のしらむといへることわり、かなはずやあらん。されは、かた／＼申むねあるにまかせて、ちとこそ申置侍らめ。

廿七番

左

嘉樹

初瀬山暁月にあかくめは影のみにしむ墨そめのそて

右 かち

維足

明日ありと思ふこゝろのおこたりをいさめてひゝく入相のかね  
此つかひ、おなしほとなるうちに、左の暁月とある、いさゝか耳にさはるこゝちす。おなしほとこの事ながら、暁つくよといふ時は、しらへさゝはる事なし。此さかひ味ふへき事にや侍らん。されは、右のかたとや申置てん。

廿八番

左 持

信之

高野山時雨に道をいそく哉こけの衣をまくりてにして

右

孝儀

けふもまた暮ぬとつけて終に身の今はかねとならんかなしき  
左、あたらしう、しかもあるへきさまをおもひよられて、と、  
こほるふしもみえ侍らす。右又かなしう聞えたるか上に、こ  
とにことはつゝきもはたらきたり、との衆議も侍れは、よろ  
しき持とこそ申置侍らめ。

廿九番

左 持

嘉保

たつね入高のゝ山の月はれて心のやみはのこるともなし

右

通清

さらぬたに淋しき秋の夕くれにくれぬとつくる山てらのかね

左の世をすてし心のうち、右の夕くれのこゝろほそき、かた  
／＼おなしほとに聞え侍り。

三十番

左

宗肅

おき明しおこなふ夜はのいつよりか心の月はすみわたるらん

右 かち

芳洲

誰闌の枕にかまつひゝくらん暁つくる山てらのかね

左の心の月さやかに聞え侍れと、初五いさゝか心ゆかぬ  
こゝちするか上に、いつよりかといへるには、すみわたりけ  
んといひなすかたにやと、おもひまとはるゝかたも侍り。右  
のかねのおと、ことにさやかに聞えて、さゝはる物もみえわ  
たらすや侍らん。

卅一番

左 持

孝儀

墨染にそめし袖こそやすけなれ此世をかりのやとりにはして

右

宗肅

行暮し旅ちおほえてみにしむは山本とほき入相のこゑ

左、袖こそやすからめとありて、下をかりの宿とみなしてな  
とやうにあらは、一きはなるへくや。右は、入相のかねのほ  
のかなるをきゝて、旅の夕を思ひいてたるは、必有行ほと  
事ならん。一首のけしきさこそ聞なされ侍れ。家にありな  
から、いふへしともおほえねは、さるわたり、いさゝか事つ  
くさぬかたや侍らん。されは、かた／＼あしからすは侍れと、  
いつれをよしとも定めかね侍り。

三十二番

左

維足

世間の花をみすてし墨染の袖こそふかきにほひ也けれ

右

信之

黒谷のかねの響はよの中のちりに落てもさやか也けり

世の花をみすてし袖のほひきこそ聞え侍れ。黒谷の  
かねのひゝき、一きはしらへ高くは聞え侍れと、三四のつゝ  
き、世のちりの中におちてもとこそ、いはまほしけれ。一首  
の上は、左にはいたくまさりてみえ侍れと、さる心ゆかぬか  
た侍れは、せんかたなくしはらく左と申置侍也。

卅三番

左

穂主

雲水の清き心にすみぬらん横川のおくのすみそめの袖

右

嘉樹

浮雲は谷間／＼にをさまりてほのかにひく入相のかね  
横川の奥の墨そめの袖、おこなひすましたりと聞ゆ。又、み  
山のてらのかねのひき、いさゝか聞まとふかたなし。かた  
／＼ちからいりて、そのたけおなしほとに聞え侍り。もつと  
もよろしき持なるへし。

卅四番

左 豊苗

ちりのよのましはりすてゝ雲水の行へやしたふ墨染の袖

右 かち 竹弘

暁の枕にひくかねの音はいくらの老のね覚とふらん

左もあしからすは侍れと、右のかたなにとなく老の心にしみ  
侍りてなん。

三十五番

左 通清

くもりなき心をなとか墨染の袖になつそふ身とはなしけん

右 かち 正熙

みにしみて入相のかねのかなしきは物おもふ秋の夕也けり

心をなとかなとつよくいひなしたらんには、なつそふといへ  
る詞、いきほひおくれたりとや申ん。右は、秋の夕のけしき  
いひかなへられたりと申へし。

卅六番

左 ち 芳洲

いかなれは此世をかりのやとりとも思ひすてゝや墨染の袖

右 嘉保

世の人のちりにましらぬ心をはうこかしそ来つあかつきのかね

左、いかなれはとあらんには、おもひすてけんとうくへきに  
や。右は、よのちりにいまたましらぬ暁の心をはうこかしそ  
むるとやうになくは意たらはぬこゝちす。されは、ちとこ  
そ申置侍らめ。

卅七番

左 樵夫 宗肅

朝夕にこりつむ真柴年をへて老の重荷と成にける哉

右 苗 かち 嘉保

ふしもよしこゑはた高し鶯のねくらの竹や笛に切けん

左、理はさるへく聞え侍れと、右のふし、よく吹なしたる笛  
竹のあなおもしろと聞なさるゝにはおとりたりとやまをさ  
ん。

卅八番

左 正熙

柴人のかよひなれたる山路は世のさかよりもやすけかりけり

右 かち 竹弘

小夜深くたれか吹らん久かたの月にすみ行笛竹の声

よのさかのあやふきにくらふれは、ほきちつたひもけにやす  
かるへくなんおほえ侍れと、こともなき笛のしらへ、中々に  
心さはやきて聞え侍れは、右とや申侍らん。

卅九番

左 持 嘉樹

折そへむ花たになしと柴人のなけきのみこる時も有けり

右

信之

膝の上に打ねふりつゝから猫もしつけき笛のねをや聞らん  
左の樵夫もこゝろあり。右の猫またこゝろあり。いつれの  
こゝろかふかゝらんと考へ侍れと、おもひわくかたも侍らす。

四十番

左 勝

豊苗

さをしかの声より奥に分いりて賤は紅葉のつま木こる也

右

穂主

おもしろく牛もうかれて帰るかなわらはか笛の音にひかれて  
左、秋ふかきみ山の趣をかしようみ出られたり。右は、おも  
しろと牛もうかれて帰るらんとおもひやるやうの意にい  
はまほし。されは、右の奥山、こゝろふかくや侍らん。

四十一番

左 かち

維足

つま木こり年をつめとも山賤か庵の煙はたてそかねつる

右

孝儀

足からの峰の松風つたへてやいまも吹らん笛竹の声  
左、またをかしようつゝけられて、申むねは侍らす。右も、さ  
ることながら、かの義光朝臣のふることならんには、笙の笛  
のこゝろみゆへくや。笛竹と有にては横笛のかたにきゝなき  
るへし。されは、申むねなきにまかせて左と申てん。

四十二番

左 かち

芳洲

夕月のほのめくかけをしるへにて谷のかけちを帰る柴人

右

通清

秋の野のゆふへの風に吹あはす笛の音きけは淋しかりけり  
秋の野の笛のねも、あはれならすは侍れと、谷のかけ有に、  
夕月のさしたらんけしき、行てみるかこときこゝちし侍れは、  
又左とこそ申置侍れ。

四十三番

左 持

嘉保

ゆふへ／＼かつく重荷に月かけをかるけにのせてかへる柴人

右

正熙

さひしさをたかなくさむるわさならんさもおもしろき笛竹のこゑ  
左、重荷ながらも月かけはかるくのせとやうに、いひなき  
まほし。右、上のいひさまにては、下のかた今一きはの趣あ  
るへうこそと、おもはれ侍れは、さるかたにおしあはせて、  
持とや申置侍らん。

四十四番

左 持

竹弘

柴人のうたへはうたふ山彦はみ山の奥の友と成らん

右

嘉樹

あけ巻かかへる野末に吹笛の声の行へは暮はてにけり  
此つかひ、さはかりのけちめもみえ侍らぬにや。

四十五番

左 持

信之

柴人のつま木を市にはこふらん谷間の斧の音そ絶たる

右

芳洲

木からしに吹あはせたる笛竹の声いつくまで泣とほるらん  
左、市にはこふほとならんなどやうにあるへくや。右、源氏  
物語をおもひよられてをかしうは聞え侍れと、末のかた、い  
つくまでとあるには、さえわたるらん、又は声いか斗泣とほ  
るらんなどあらまほしきこゝちすれば、又持とこそ申置侍ら  
め。

四十六番

左 持

穂主

柴人のなれてはやすく帰る哉ゆふへとくらき谷の下みち

右

宗肅

舟とめて誰か吹らんすみた川月にすみ行笛竹の声

左、行なれたる道のまかふ筋なく、右、又てる月のさやかな  
る笛のねにして、かた／＼申むねなく聞え侍れば、よろしき  
持なるへし。

四十七番

左 持

孝儀

事なくてやすけにみゆる山の奥になけきこりつゝ世をわたる哉

右

豊苗

月に誰吹しらふらん笛竹のあなおもしろきよはにも有かな  
左右ともに、さはかりの手際もみえ侍らす。おなしほとなる  
へくや。

四十八番

左 かち

通清

柴人はつま木に花を折そへてみ山の春をうらんとすらん

草かりか笛の音ちかく成にけり野末の風やこなた吹らん  
左、み山の春をうらんなど、めつらしうおもひよられたり。  
右、下のかたは、をかしう聞なされ侍れと、初五みやひなら  
ぬ詞にや侍らん。されは、つま木にそへし花の匂ひまされり  
と申へし。

四十九番

左 海人

正熙

世のわさをすてたる蟹も一すちの釣のいとは猶ひかれつゝ

右 船 かち

宗肅

明わたる大和国中に天つ日のしるしまはゆくみゆる舟哉

左、つりさるはずなはち蟹か世のわさなるをすてたるといへ  
る、うちあひかたくや侍らん。右哥、しるしまはゆくといへ  
るわたり、ふと聞まとひ侍るを、立かへり考へ侍れば、上の  
かた、したゝかにしらへなしたるにて、かの日の丸の印とは  
思ひえ侍り。されと、天つ日といひて、たゝちにしるしとあ  
るは、かの神の験などやうのかたに、まきはし。天つ日の  
旗手などいはゝ、聞まとふかたなかるへし。一首の上におき  
ては、いとをゝしく聞え侍れば、さるふしもましれゝと、左  
にはまされりと申へし。

五十番

左 かち

竹弘

釣たるゝ糸一すちをたのみにて露の命をつなく蟹かな

右

嘉保

住吉の神のおまへの浜かせにまほをかけつゝいつる舟哉

右、まほをかけつゝといへる詞、うひ／＼しくや聞え侍らん。  
左のかた、よしまてはあらねと、右にはおくるましくや。

五十一番

左 嘉樹

月のよは沖へよゝしとよひかはし舟出をいそく浦の蟹人

右 かち 孝儀

わたつみの波ちひらけし君か代はこと国までも舟そ行かふ

左、趣はをかしけれど、初五いさゝか心ゆかす。月てれはな  
ともやいふへからん。右は、今のうちつけをさなからよみ出  
られたる。申むねも侍らぬにや。

五十二番

左 かち 信之

あはひとる蟹にとはましわたつみの都の春の花はいかにと

右 芳洲

おほつかな山さへ見えぬ海原を風にまかせて舟の行らん

右哥、上のかたにかけては、下のかた、けおくれてやみえ侍  
らん。左は、申むねなく、しかもめつらしうおもひよられた  
れは、もつともかちたるへし。

五十三番

左 勝 豊苗

かつきせん蟹にとはましわたつみの庭にことはの花はありやと

右 維足

漕つれて湊を出る朝ひらき舟の心ものとけかるらん

左、初五かつきすとあるへきを、せんといはれたる、をし

むへし。さる難はありなから、一首の上におきては、右より  
はいたくまさりぬへし。

五十四番

左 持 穂主

沖に行網のつな手の一すちに世わたる蟹のわさそはかなき

右 通清

和田の原むかふ小島もみる中にこきはなれ行蟹小舟哉

此つかひ、おなしほとにあしからすみえ侍れり。

五十五番

左 宗肅

年ふれとかつきいてたる玉もなしすゝりの海にあまとなりつゝ

右 かち 竹弘

今はとて立る煙のたちまちに千里をはしに車舟かな

左は、我上を海士によせたるにて、題意たしか也とは申かた  
かるへし。右は、車船の煙立まよふすちもみえ侍らす。

五十六番

左 かち 嘉保

夕汐にかつをよる也沖遠くみたれてみゆる蟹のつり舟

右 豊苗

のる人の命を真帆にかけそへてあら海わたる舟のあやふさ

右、命をまほる、かけそふるといへるわたり、聞まとひ侍り。

左、趣はふるけれど、こともなければ右にはまさりぬへし。

五十七番

左 持

芳洲

釣のいと心ほそくも世をわたる蟹かうへこそかなしかりけれ

右

正熙

追手ふく沖への帆かけすゝむとも見えぬや舟の遠き成らん

左、めつらしからねともなし。右、あるへきさまをつゝ  
けられたる、又あしからず。

五十八番

左 かち

通清

いせの海の沖の干かたに舟よせて蟹はいかなる貝ひろふらん

右

信之

大比えの高ねおろしを帆にうけて矢橋に走る舟きほふ也

さき／＼釣するも綱引するもみえたれと、此海人はいさゝか  
やうかはりて、めつらしうや聞えん。右は、ことなるふしも  
侍らねは、めつらしきにつきて、左とや申侍らん。

五十九番

左

維足

世わたりと思へはこそあれ貝ひろふ蟹か手わさそはかなかりける

右 かち

穂主

追手ふく風にまかせて行舟はかちとる人やたのみ成らん

前の蟹をめつらしとみつれば、又こゝに貝拾ふかみえたり。  
されと、右の下のかた、もつともさるへきことわりとこそ承  
り侍れば、真帆ひく綱のゆるひなきにまかせて、勝とこそ申  
へけれ。

六十番

左

孝儀

海人ならたれか取えむわたつみの千尋の底にしつむ鯨は

右 かち

嘉樹

名もしらぬ遠つ国よも島ねよりみつきはこふ舟そ絶せぬ

わたつみの底のあはひは、蟹ならずして、たれかはとらんと  
はいふ迄もなき事にや侍らん。右、島ねのねといへる、いさゝ  
かさはるこゝちすれと、けにちかき比は、聞なれぬ国の船と  
もまひくる事、年々引もたえず、さるをよみ出たるは、これ  
やはしめならんと、めつらしければ、いさゝかのふしはさて  
置て、右とこそいはまほしけれ。

六十一番

左 隠士

維足

のかれきてみ山にやすく年ふるも君かめくみの外ならずやは

右 かち 琴

正熙

松のかせ谷のなかれをかきつめてならずことこそたのしかりけれ  
左は、つかへをしそきたる人に、君より身をやしなふへき料  
なと給はりたるにやとこそ聞なされ侍れ。右も、故あるさま  
なから、古のあまり心ふかくて聞まとふかたあるよりは聞え  
やすきにまかせて、右とや申侍らん。

六十二番

左

孝儀

昔よりうき世のちりをいとひては山の奥にそみをかくしける

右 かち

竹弘

いにしへの嵯峨野の秋の月かけもおもひやらるゝよはのつま琴  
左、あまりにありのまゝにや聞え侍らん。されは、右のいう

なる琴の音にこそ心ひかれ侍れ。

六十三番

左 かち

芳洲

世のちりを遠くへたてゝ山水のひとりすむこそ静けかりけれ

右

嘉樹

おのつからみねの松風かよひきて月にゆかしきことのねそする

左の山水、右のことのね、いつれも聞まふかたはなけれど、  
猶立かへり考へ侍れば、山水の音や一きはあはれふかゝらんと  
聞なされ侍り。

六十四番

左 かち

通清

足曳のみ山の奥にかくれてもかくれぬ物は名に社有けれ

右

豊苗

つま思ふことのしらへのしめる哉いつれのをにやなみたかけゝん  
左、さるへき人の世をのかれたるならんと、ことにゆかしう  
こそおもひやられ侍れ。右のことのね、しらへみたるには  
あらねと、左の心たかさには、かけても及ひかたくや侍らん。

六十五番

左 かち

宗肅

あかためしこゝろにかけす成しより夢も都にかよはさりけり

右

信之

さよ更て空にすみ行琴のねは月の為にやしらへそめけん

又さるへき隠者となへてならす聞なされて、よみ人さへにゆ  
かしうおもひやられ侍り。右も、あしからすは聞え侍れと、

左の力あるにはいたくおとりぬへし。

六十六番

左

嘉保

世のにこりよそになしつる山水のひとりすむこそたのしかりけれ

右 かち

穂主

小菘ちるさか野の月に聞ゆ也空ねをしたふよはの琴のね

左、世のにこりにましこらぬ心のほともみえ侍れと、右、駒  
をすゝめて聞えたらん、古のさま、おもひうかはれて嵯峨野  
のかたに心ひかれ侍り。

六十七番

左 持

正熙

わか君のめすをいとふにあらねともいてゝかひこそなき世なるらめ

右

嘉保

ひくことのねにあらはれて山川の水は下樋にまつかよふらん  
左、せんかたなきよのありさまには、おほけなけれど、しか  
おもひなげくらん人もあるへうこそ。右、また山にいでて、  
心をやしなふ隠士のわさならんと、かた／＼ゆかしうおもひ  
やられて、いつれともまをしきたためかたし。

六十八番

左

竹弘

山ふかくかくれすみしも大君のみちあるみ代をまちて也けり

右 かち

宗肅

緒をたゝん歎はしらし山水をともとなしつゝかきならすみは  
左、あまりみ代をおもひおとしたるかど聞なさるゝか上に、



四の句道あらんなどいふへきこゝちす。右は、さる申むねも侍らぬにや。

六十九番

左 持 嘉樹

山水にみをまかせつゝうつせみの世をのかれすむ松の下庵

右 通清

たをやめか玉のを琴のしらへには我心さへひかれぬるかな

左右ともに、さるふしもなく、又難もみえ侍らす。おなしほととの哥なるへし。

七十番

左 持 信之

しら雲の深くも山に入ぬれとかくれぬ名こそ世にきこえけれ

右 芳洲

かきならず琴のね高く成ぬるは軒の松風吹やそひけん

左は、六十四番のおなし趣なれと、またあしからす。右も、さしていふへきふしもみえ侍らねは、又持と申置てん。

七十一番

左 かち 豊苗

何にかは都はなれてすみにけん岩くら山の有明の月

右 孝儀

伝こし人のこゝろのつくしこと事そともなく思ひしやなに

右、下のかた、事そともなく何思ひけんとあるかた、ことなかるへくや。さる申むね侍れは、左のありあけの月光ありとや申侍らん。

七十二番

左 持 穂主

うつせみの小河のあさをわたらしのこゝろや清き名を流しけん

右 維足

月かけの更て声するつまことはつま思ふてふしらへ成らん

左、さる隠士のさまをいとよくいひとられたり。されと、上のかた、所の名をかくいひなしたるは、心ゆかぬかたも侍るにや。こはあまり所の名をあらはにいひ出ては、こゝろあさしとのよみ人の心つかひ成へし。右は、想夫恋の曲、聞まふかたなし。さて左は、申むねなきにあらねと、一首の上におきては、ことにをかしう聞なされ侍れは、さるふしはありなから、持とこそ申置侍らめ。

勝六 勝五 勝四 勝四

持四 持二 持六 持六

負二 負五 負二 負二

勝四 勝四 勝四 勝四

持五 持四 持四 持四

負三 負四 負四 負四

勝四 勝三 勝二

持七 持五 持七

負一 負四 負三

勝二 勝二 勝一

持六 持六 持六

信之 嘉樹 孝儀

負四

負四

負五

(佐賀県立図書館所蔵伊杉 19-10495)